



Title	古典的テキストにみる戦争と真実 : 『五月のセヴァストーポリ』について
Author(s)	森光, 広治
Citation	大阪大学言語文化学. 2007, 16, p. 67-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77870
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古典的テキストにみる戦争と真実

—『五月のセヴァストープオリ』について—*

森光 広治**

В этой статье мы будем анализировать «Севастополь в мае» Толстого, особенно последний параграф, с эстетической точки зрения.

«Герой же моей повести, которого я люблю всеми силами души, которого я старался воспроизвести во всей красоте его, и который всегда был есть и будет прекрасен - правда.»

Хорошо нам известен этот последний параграф, но до сих пор очень мало изучен исследователями. О прототипе этого параграфа конечно ни слова невозможно найти в прошлых исследованиях.

Мы нашли одно предложение Цицерона о правде в книге «De inventione» как прототип Толстовского предложения, и этим косвенно освещается правда-герой «Севастополя в мае».

В начале своего творчества у Толстого был замысел «Четыре эпохи развития». Этот замысел не был осуществлён после третьего этапа развития «Юность». Четвёртый этап отдельно вошёл в разные произведения, в кавказские рассказы и севастиопольскую трилогию, «Утро помещика», «Казачьи», и наконец «Война и мир».

Севастополь в мае есть очень уникальный художественный текст. Мы знаем что в 19-том веке среди русских писателей шла борьба за сюжет произведений, то есть русская повествовательная проза была в постоянных кризисах. Это хорошо ощущается в рассказах Толстого, особенно в Севастополе в мае.

Можно сказать, что до сих пор нам интересно знать, какая эстетическая особенность у Толстого, переживающего социальный и художественный кризис.

1はじめに

レフ・トルストイ (1828-1910) と戦争は切っても切れない縁がある。トルストイは軍隊の中で、カフカスの戦争 (1851-1854) において作家としての自分を確立した¹⁾。

* Война и правда в классическом тексте О севастополь в мае МОРИМИЦУ Кодзи (MORIMITSU Koji)

** 大阪大学言語文化研究科博士課程後期

¹⁾ Эйхенбаум Б., «Толстой на Кавказе. 1851-1854», Ленинград, 1974.

トルストイの初期作品群には、『幼年時代』を含む自伝的傾向の作品群と、戦争と軍隊に関わる一群の軍隊小説がある。本論ではその中の一つ、『五月のセヴァストーポリ』を取り上げ、テキストの一部を分析している。

1. 1 『五月のセヴァストーポリ』概略

『五月のセヴァストーポリ』はいずれもクリミア戦争に取材したセヴァストーポリ三部作（『十二月のセヴァストーポリ』『五月のセヴァストーポリ』『八月のセヴァストーポリ』）の二番目の作品にあたる。おおまかに言って『十二月のセヴァストーポリ』では、危険な任務を黙々とこなす無名兵士たちの静かな勇気と秘められた愛国心が詩い上げられ、『五月のセヴァストーポリ』では一転して将校たちに批判の目が向けられ、『八月のセヴァストーポリ』においては有能でしかも兵士たちに愛される将校が描かれている。『五月のセヴァストーポリ』は、私見では正・反・合からなる弁証法的構造の三部作における中核を成す作品である。

三部をまとめてセヴァストーポリ物語ともいわれるこれらの作品は、クリミア戦争（1853-1856）²⁾ 中、最大の激戦地であったセヴァストーポリ、その中でも最も危険であった第四稜堡（четвёртый бастион）において、実際に勤務していたトルストイの実体験に基づいた戦争小説である。クリミア戦争は、ナイチンゲールがその英雄的看護活動によって看護の地位を高めた戦争でもあり³⁾、当時の技術が注ぎ込まれた戦争であり、する必要がないのに起きてしまった不思議な戦争でもあった⁴⁾。『五月のセヴァストーポリ』の中でトルストイは戦争と戦争に関わる人々を描いている。祖国防衛のために危険でつらい任務を黙々とこなす無名の兵士（солдат）たち、勲章と昇進のことを考えつつ戦争を眺めている上級将校のグループ（аристократы）と彼らと交際できることを喜びに感じる下級の将校（офицер）たち、夜空を輝きながら飛び交う爆弾、死体に埋もれた両軍間の谷間とそれを片付けるための一時休戦、そしてまた開戦、おおまかに言えばこれらの事柄が描かれている。『五月のセヴァストーポリ』はトルストイの初期軍隊小説群の中でも独自の地位を占めている。チェルヌイシェフスキーがトルストイの特徴

²⁾ クリミア戦争は、ワラキア、モルダヴィアに軍を進めたロシア側が、英仏連合軍が動くとき軍を撤退させた。それゆえ英仏とロシアは直接的には戦争を行う理由を持たなかった。しかし結局泥沼の戦争に突入し（連合軍は短期間で勝利する予定であった）、両軍とも多大な犠牲を払って、連合軍はセヴァストーポリを陥落させ、ロシア軍はクリミア北部へ撤退した。結果としてクリミア戦争はロシア農奴制の後進性を暴露し、農奴解放に拍車をかけた。

³⁾ ナイチンゲールは1854年11月にスクタリ（現ユスキュノダール）に赴任、1855年5月にはクリミア半島バラクラヴァへ向かう。

⁴⁾ 新井政美、『トルコ近現代史』、みすず書房、2001、53頁。またはТарле Е.В., Сочинения 9, стр 8-9, Москва, 1959.

を指摘した初期論文⁵⁾の中で、この作品を引用しつつ驚きを述べている。『五月のセヴァストーポリ』はチェルヌイシェフスキーだけでなく、同時代の作家たちをも驚かせた⁶⁾。

1. 2 問題提起

美学的観点からみて、トルストイの初期作品群には多くの問題が含まれている。作家は一作ごとに、善し悪しは別にして、新しい主題に取り組んでおり、その度に新しい小説戦略、テキストの美学的戦略を用いていた、とって過言では無い。

その中でも『五月のセヴァストーポリ』では、いくつかの点で際立った特徴を持った物語テキストだと言える。その一つを挙げるならば作品の最終パラグラフであろう。

引用(1) “Герой же моей повести, которого я люблю всеми силами души, которого я старался воспроизвести во всей красоте его, и который всегда был есть и будет прекрасен - правда.” (4, 59)⁷⁾ .

「私が魂の力の全てをかけて愛し、その美しさにおいて私が再現しようと努め、過去、現在、未来にわたって美しくある、そういう私の小説の主人公は-真実である。」

作品末というテキスト上重要な位置にあるこの文章は、意外にも今まで研究者らによって問題とされることがほとんどなかった。「主人公は-真実」である、と作者が言っているが、では真実とは何か、という問いにはすぐさま答えることができない。それは人間とは何か、という問いにも似て、直接答えることが困難な問いである。そこで本稿においてはこの最終パラグラフを中心としたテキストの問題を直接的ではなく、間接的に、側面から考察、分析を試みる。本稿では、最終パラグラフその他を作者の美学的戦略として捉え、側面から光をあてることとする。

2 分析の手がかり

今回、分析の手がかりに使用するのはキケロ (B.C.106-43) の『発想論』に表された一文である。これをもとにして作者の美学を考察、分析する。

⁵⁾ Чернышевский, «Детство ,Отрочество ,и военные рассказы г.Толстого,1856», в Полн. собр. соч. т.3, Москва, 1939.

⁶⁾ ツルゲーネフは手紙の中で『五月のセヴァストーポリ』のことを指して「恐ろしいものだ!」といい、(Тургенев И.С., «Пол. соб. соч. в 30томах», Москва, 1987, т.3, стр.65)、ネクラソフは1855年9月2日付けの手紙で「・・・これはまさにロシア社会に今必要なものです。真実です、真実、ゴゴリの死とともにロシア文学にわずかしが残っていないものです。・・・」としている。(59,332)。

⁷⁾ トルストイに関してはすべて90巻全集(Лев Толстой, Полное собрание сочинений в 90 томах, Москва)から引用し、巻数と頁数のみを記す。

言述を展開する上で作品の終わりは、どのような物語作者にとっても重要な位置を占めている。従来の研究では、この最終パラグラフが疑問をもって取り上げられるということはほとんどなかった。作者は、「主人公は—真実」である、と作品を結んでいるが、これは先行研究によってトルストイ的美学の方向性として確認されて来た⁸⁾。

19世紀のロシアの作家たちがそれぞれの真実を激しく希求していた、ということに関してはほぼ異論のないことであろう⁹⁾。問題は各人が各様の真実を追究していたことであり、トルストイは彼自身の方法で真実を追求していたと言える。

ではその真実とは何か、と問いを急ぎたくなるが、本稿ではそのような問いの立て方を取らない。何故なら、この「真実」は『五月のセヴァストーポリ』にとどまらず、他の全ての作品、またロシア文学の伝統とも関係してくるからである。

2. 1 最終パラグラフとキケロの『発想論』

まず引用(1)を詳しく分析してみる。最終パラグラフは数行からなる長い一つの複文である。トルストイは一つの長い複文に自己の美学を凝縮させて表現することがあるので¹⁰⁾、普通の場合でも複文には注意が必要であり、最終パラグラフとなればなおさらである。

「主人公」は三つの関係詞によって限定されている。「私が魂の力のすべてをかけて愛し」、「私とその美しさの全てにおいて再現しようと努め」、「過去、現在、未来にわたっていつも美しくあるだろう」、という三つの限定がかかっている。「美しい」という言葉が繰り返されている点で小説の美学を表しているといえる。「魂の力」という言葉は、日記にまれに現われるものである。

本論では「過去、現在、未来にわたっていつも美しくあるだろう」という部分に注目して考察する。考察の手がかりとして使用するのが古代ローマの著述家キケロの『発想論』の中の一文である。その一文は次のようなものである。

引用(2)「真実とは、現在や過去の出来事や将来起きることを、ありのままに述べることである¹¹⁾。」

⁸⁾ 例えば Маймин Е. А., «Лев Толстой», Москва, 1978, стр46-55.

⁹⁾ アザイア・バーリン、「ロシアと一八四八年」、『ロマン主義と政治』所収、岩波書店、1984。

¹⁰⁾ 『幼年時代』の冒頭がよい例であるが、他の作品群にもあてはまると考えて間違いない。

¹¹⁾ キケロー、『キケロー選集 6』片山英男訳、岩波書店、2000、「発想論」2巻、53章。以下にラテン語原文を掲げる。

“veritas, per quam immutata ea quae sunt aut ante fuerunt aut futura sunt dicuntur” CICERO, De inventione, II, LIII. The Loeb classical library, London, 1949.

これは法廷における弁論術に関する文章であるが、トルストイはこのキケロ的「真実」を美学的に翻案し、独自のものとしてテキストの中に織り込んだ可能性が高い。つまり「真実」とはかつてあったこと、今あること、これからあるだろうことをありのままにのべることであり、トルストイはキケロの「真実」に美学的要素を加え、小説の「主人公」を限定する要素とした。そしてこのキケロの文章を手がかりにすると、テキストの意外な一面が見えてくるのである。

2. 2 キケロとトルストイ

トルストイの初期の日記（1851-1856、全集では46、47巻）によれば、カフカス時代からクリミア戦争当時にかけてトルストイの読書傾向は多岐にわたるが、作家に限って主なものを挙げると、カラムジン、レールモンツフ、プーシキン、トゥルゲーネフ、ゴーゴリ、グリボエードフ、ルソー、バルザック、ジョルジュ・サンド、ジャン＝アルフォンス・カール、ベランジェ、ゲーテ、シラー、ディケンズ、サッカレー、サミュエル・ウォーレン、フェニモア・クーパー等である¹²⁾。日記の中にトルストイがキケロを読んだという記述はない。ではトルストイはキケロを読まなかったかというところではない。トルストイのキケロとの関係は、作家修業がはじまるカフカス時代以前に遡らなければならない。

1844年にトルストイはカザン大学アラブ-トルコ学科へ自費学生として入学する。その入学試験には他の教科に混じってラテン語の試験があった。当時の試験は口頭試験であって、試験官（専門の教授）が受験者に幾枚かのカードから一枚を選ばせ、問題をその場で露訳させる、というものだった。試験の成績は0～5で評価され、5が最高であった。

このことが自伝的性格の小説『青年時代』において、独特の形で印象深く再現されている。『青年時代』第12章「ラテン語の試験」では、主人公ニコレンカとイコーニンが、恐ろしいと噂されるラテン語の教官の前で、口頭でラテン語を露訳する。イコーニンはニコレンカと比べて明らかに学力が落ちる生徒であるが、ラテン語を教官の助けを借りつつも（後に判明するが、教官はイコーニンの庇護者であった）なんとか露訳する。そのラテン語のテキストが、キケロの『弁論術』（ロシア語原文では“Книга речей”）である。またニコレンカはラテン語を家庭教師サン・ジェロームに教えてもらってお

¹²⁾ これらの作家の中で本論と関係が深いのはサッカレー（William Thackeray, 1811-1863）である。クリミア戦争当時トルストイはサッカレーの『虚栄の市』や『ヘンリー・エズモンド』を読んでいる。特に『虚栄の市』は副題「主人公のいない小説」によって『五月のセヴァストポリ』とつながりがあり、さらには作品中に「・・・真実とはありのままを述べることである」（『虚栄の市』（一）、三宅幾三郎譯、岩波文庫、1939、150頁。）という文章がある点はトルストイとキケロの関係性を間接的に裏付ける事実として重要である。

り、辞典なしでキケロを訳していたことが描かれている。

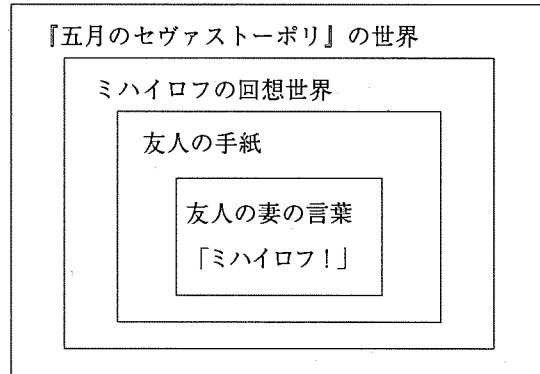
トルストイのキケロへの親しみは『青年時代』に終わらない。大学中退後の自己教育プログラム（1847）の中にもローマ法やラテン語の科目があり、キケロとのつながりを感じさせる。確かに、ルソーやパスカル、ショーペンハウエルに対するような熱烈な愛情の表現は見当たらない。しかし『戦争と平和』のエピローグの異文には、キケロの『運命について』への言及がみられ、他の作品の中にもキケロの名前が散見する。さらに晩年に至るとキケロが頻繁に引用されるようになり、「Круг чтения」（1906–1907）、「Путь жизни」（1910）、「На каждый день」（1906–1910）にはキケロの言葉が多数収録されている。このようにトルストイは生涯キケロに親しんでいたのである。以下にこのキケロの「真実」からみた登場人物の分析を試みる。

2. 3 人物の分析

2. 3. 1 ミハイロフについて

『五月のセヴァストーポリ』第2章はミハイロフの描写に捧げられている。このミハイロフは決して重要な登場人物ではないにも関わらず、非常に詳しく描かれている。作者はミハイロフの外見から描写をはじめますが、それはあたかも作者がミハイロフをはじめて見るかのような描き方となっている¹³⁾。ここにフォルマリスト・シクロフスキーが指摘した「異化」の方法をみてとることも可能である¹⁴⁾。

外見の描写に続いてミハイロフの名前が作品世界に現れる。「ミハイロフ」という固有名詞は語り手によって直接導入されずに、複雑な過程で作品世界に顕在化する。それはミハイロフ自身が回想するT県に住む友人からの手紙の中で、友人の妻がミハイロフのことを話題にする、という形をとる。図のようにこ



こまで複雑な過程を経て作品世界に顕在化するが、彼は主人公ではない。（これはロシア語の動詞の時制の問題である可能性があるがここでは触れない。）

¹³⁾ エイヘンバウムはこの手法に注目して「他者の知覚を通じたかのような方法」と指摘している。Эйхенбаум Б., «О литературе», Москва, 1987.

¹⁴⁾ Щикловский В., «Искусство как приём», в «О теории прозы», Москва, 1929.

この手紙の回想に続いて、さらに「ミハイロフは思い出した・・・」という形で過去の事象が思い起こされる。手紙をくれた友人とその妻のこと、彼らとの友情についてなどである。その後にミハイロフの未来における望みがモノローグの形で述べられている。自分が軍功をあげて新聞に載り、ゲオルギー勲章を得ること、少佐に昇進すること、さらには中佐や大佐に昇進することが描かれている。

これら過去の回想、未来への空想が描かれた後、現在のミハイロフが最後に描かれている。それによれば、「彼は大通りで、いつもの歩兵二等大尉として、たいした意味もなく、不器用でおどおどしたものとしてあった。」となっている。

このようにミハイロフは外見、過去の回想、未来への空想、現在の状態、といったやり方で描かれている。彼は現在、過去、未来における時制において詳しく描かれている。ミハイロフを作品世界で規定している複雑な方法は、先に挙げた引用(2)の真実の規定と合致しているのである。

2. 3. 2 プラスクーヒンの死

ミハイロフに関して述べたことは、第12章のプラスクーヒンの死の描写においてもあてはまるのである。プラスクーヒンは作品世界の中で、否定的な人物として、「害のない、空っぽの」人物として描かれている。彼は作品の中で言及されることの少ない登場人物であり、少ない情報ではあまり評判のよくない人物である。

第12章におけるプラスクーヒンの死が心臓死から脳死への過程を描いたものであることは、先行研究によって既に解明されている¹⁵⁾。チェルヌイシェフスキーが初期論文で、このプラスクーヒンの死に言及して以来、死の描写の迫真性は多くの研究者によって繰り返し確認されて来た¹⁶⁾。ここではプラスクーヒンの死の瞬間における内的モノローグに着目して考察する。

指揮官の命令を受けて、プラスクーヒンとミハイロフは部隊を後方部隊に合流させようとするところであった。彼らが危険な任務地からさほど危険でない場所にさしかかった時、プラスクーヒンは背後で輝く稲光のようなものを見た。一瞬爆弾の方向を見失うが、次の瞬間には部隊の方へ向かってくるのが分かった。そしてプラスクーヒンとミハイロフの間に着弾する。この場合の爆弾は雷管付きの榴弾であり、着弾から爆発まで時間差があった。問題の内的モノローグは爆発直前の一瞬に展開されたものである。その一瞬の間に、プラスクーヒンの脳裏には「感情、思考、希望、記憶の全世界」がよぎっ

¹⁵⁾ 法橋和彦、本多秋五全集月報10 - 12、「[死の描写]と翻訳論の一端に触れて(一)-(三)」、1996, 2, 5, 7。

¹⁶⁾ 最近の研究ではレッシキスに触れている。Лескис Г., «Лев Толстой 1852-1869», Москва, 2001.

た。プラスクーヒンはまず未来の方向に向かって思考する。「誰がやられるのか？自分かミハイロフか？それとも二人一緒にか？」と思考をはじめ、「頭をやられたらおしまいで、足をやられたら切断せねばならない、その際クロロフォルムが必要だ」と連想する。

その次に、一転して過去を回想する。ミハイロフに借りのある12ルーブリ半、ペテルブルグでの借金、昨日の晩のジプシーの歌、かつて愛した女性のこと、5年前に受けた侮辱のことを連想する。この間、無数の記憶とともに死の恐怖が彼を離さない。連想の最後に現在の地点に戻ってくる。

そして「ひょっとしたら爆弾は爆発しないかもしれない」と考え、目を開けようとした瞬間に爆弾が爆発する。この時点でプラスクーヒンは胸に破片を受けて即死である。しかし脳は数秒間生きて活動している。この心臓死から脳死へ至る描写は、過去の回想でもなく、未来への連想でもなく、プラスクーヒンにとっての現在である。その内面は爆発直前の内的モノログとは対照的に、物理的感覚に満たされている。(両腕が縛られているようで、頭を万力で締め付けられるような感覚、それが血とは知らず、傷から流れる自分の血でのどの渴きを癒そうとしたこと、体の上に石を載せられたような感覚など。)爆弾が着弾し、爆発してから完全な死を迎えるまでにプラスクーヒンは過去、未来、現在の時制で内的モノログを展開している。

また内的モノログに限らず、プラスクーヒンの死に関して全体的に同様なことが言えるのである。第12章の冒頭でペスト男爵がカルーギンにプラスクーヒンの死を告げる。カルーギンはついさっきプラスクーヒンと別れて来たばかりであった。彼は一瞬驚きを見せるが、次の瞬間には別のことを考えている。この後にプラスクーヒンの死の描写が続き、第13章ではミハイロフの臨死体験が描かれている。第14章では夜明けを知らせる朝日が昇る様子が描かれ、第15章において、将校グループの中にプラスクーヒンやネフェルドフの姿が無いことが確認されている。そして語り手は、死体がまだ洗われていないうちに人はほとんど死者のことを忘れ、ひと月たてば死者は完全に忘れられてしまうだろうと述べている。このようにプラスクーヒンの死は、現在、過去、未来の順で描かれており、キケロ的「真実」と合致する。これは後年の『イヴァン・イリイチの死』で展開される方法の先駆をなすものである。

3 第1章について

3.1 素朴な戦争論として

主人公は一真実である、という最終パラグラフと第1章は内容的に呼応する。言述戦略という観点から考えても第1章は最終パラグラフに劣らず重要な位置を占めている。

その言述スタイルは、弁論家が大衆を前に演説をするかのようなものであり¹⁷⁾、この点でもキケロとの関連を消極的にはあるが示している。

第1章第3、4、5パラグラフでは、極めて素朴なかたちでの戦争論が述べられている。

引用(3)「外交官らによって解決されない問題は、火薬と血で解決されることはさらに少ない。」(4、18)、「……もし戦っている一方の側が他方に向かっておのおのの軍隊から一人ずつ差し出したとしたら? ……」(4、19)、「実際、連合国の一代表と戦う一人のロシア人と、八万対八万の間にどのような違いがあるというのか? なぜ十三万対十三万ではないのか? なぜ二万対二万でないのか? なぜ二十対二十でないのか? なぜ一対一でないのか? ……どれがどれより論理的と言うことはない。……」(4、19)。

我々はトルストイが1844年秋にカザン大学に入学した動機の一つにロシアの対トルコ問題、いわゆる東方問題¹⁸⁾があったことを知っている。つまりトルストイはクリミア戦争以前からこの問題に強い関心を抱いていた。また、ナポレオン戦争に従軍した経験のある軍事専門家カルル・フォン・クラウゼヴィッツ(1780-1831)の『戦争論』をひとくけば、トルストイの素朴な戦争論とまったく正反対の内容にぶつかる¹⁹⁾。

第1章の素朴な戦争論は、大衆を前にした弁論家風のスタイルを抜きにして考えると、そのあまりの素朴さゆえに理解しにくいものとなる。作者は明らかに現実的でない論理を堂々と展開している。それによって論理的可能世界を創り、現実のセヴァストーポリで行われている戦争と対置させている。

3. 2 人物の規定について

主人公-真実という観点からみると、『五月のセヴァストーポリ』に登場する人物は主人公であり得ない。その人々が第1章第2パラグラフにおいて、極めてトルストイ的用法における「自尊心」(самолюбие)²⁰⁾でもって作品世界に規定されている。

¹⁷⁾ Эйхенбаум, там же, стр. 114. それによれば「増大するイントネーション、感情を込めた繰り返しを伴う、大衆を前提とした典型的な弁論家、説教のスタイル」となっている。

¹⁸⁾ オスマン・トルコの弱体化とともに先鋭化してゆく東方問題は、ロシアにおいては18世紀以来の歴史的問題であった。クリミア戦争の後ロシアはこの問題をひきずってゆく。トルストイは語学の才能を生かすべく外交官をめざすが途中でこれを放棄する。

¹⁹⁾ カルル・フォン・クラウゼヴィッツ、『戦争論』、淡徳三郎訳、徳間書店、1965。戦争は政治の延長であること、戦力を必要な地点に集中投入することなど、『五月のセヴァストーポリ』第1章の戦争論と正反対の内容である。

²⁰⁾ ここでは самолюбие は人称代名詞となっている。これに関しては法橋和彦「初期トルストイにおける「самолюбие」の用語法の諸問題」(『ロシア語ロシア文学研究』第3号、37-60頁、1971)に既に論じられている。ここでは自尊心という言葉が戦場において不可避免的にエゴイズムへと転落している。また『12月のセヴァストーポリ』においても異なる用法で самолюбие は使用されている(4、15)。

引用(4)「何千もの人々の“самолюбие”は侮辱され、別の数千は満足し膨れ上がり、さらに数千は一死の抱擁の中で平安を得た。」

ここでは“самолюбие”は人間という意味の代名詞的役割を担っている。

『五月のセヴァストーポリ』に先行する『十二月のセヴァストーポリ』において無名の兵士たちの言葉少ない勇気と愛国心が詩い上げられた。主人公＝真実である『五月のセヴァストーポリ』における“самолюбие”は、『十二月のセヴァストーポリ』における無名の兵士たちとは異なった存在である²¹⁾。

第2パラグラフにおける人々の規定は、第3章の規定に先行するものである。第3章には多数の将校たちが同時に登場する。作者はセヴァストーポリにおける将校グループの異常な心理を追求するにあたって、彼らを「アリストクラート」(аристократ)という言葉で規定する。さらに「アリストクラート」は時代の病である「虚栄心」(тщеславие)²²⁾によって規定されている。これを図式化すれば次のようになる。

самолюбие > тщеславие > аристократ

これは、将校グループの規定であり、トルストイによる反主人公・反真実の規定である。この規定は将校グループの人間像を理解するのに必要なだけでなく、彼らに対置されている一般兵士たちや非武装民間人を考える上でも必要なことである。

3. 3 将校グループの人間像について

分かりやすい例として2. 3ではミハイロフとプラスクーヒンを取り上げたが、全体としてセヴァストーポリという危険な戦場にあつて、兵士たちの上に立つ将校グループの心理は作者独自の方法で追求されている²³⁾。カルーギンやガリツィンなどは將軍付きの副官であり、彼らは前戦に指令を伝えるのが任務であつて、前線で勤務しているのではない。彼らは貴族であり、トルストイもまた同じ世界に属している。19世紀半ばのロシア貴族社会は大きな変革を迎えようとしていた。それは、クリミア戦争後農奴解放その他の改革が行われようというロシアにおいて、貴族が無条件的に貴族ではいられない危機の時代であつた。

その危機意識は、『五月のセヴァストーポリ』においても如実に反映されている。貴族である将校グループの人間像は、様々な関係において照らし出されている。夜空を飛

²¹⁾ 『十二月のセヴァストーポリ』における主人公を参照。「主人公はロシアの民衆である」(4, 16)。

²²⁾ 「虚栄心」は、この時期(1851-1855)のトルストイの日記の中に自己の弱点としてしばしば現れる言葉である。

²³⁾ プールソフによれば、『幼年時代』で肯定的主人公に使用された方法が、『五月のセヴァストーポリ』では否定的人物に使用されている。Бурсов Б., «Лев Толстой идейные искания и творческий метод», Москва, 1960.

び交う爆弾を美しい景色として眺める将校グループ（第5章）と、稼ぎ手がないため爆弾の降りかかるセヴァストーポリから出られない非武装民間人（第6章）との対照、前線で負傷した兵士とガリツインの対照（第7章）、長時間前線で勤務している下級将校とたまに前線を訪れるカールギンの対照（第9章）など、それぞれ異なった関係において貴族の人物像が描かれている。

断っておかねばならないのは、彼らの人間性の善し悪しが問題なのではないことである。それは第15章の作者による次のような言葉に表れている。「・・・彼ら（将校グループ）はとてもよい人々であったにもかかわらず・・・。」カールギンやガリツインらが勲章を求めて行動し、前線で勤務することが少なく、フランス語を必要以上に使用すること自体が問題なのではない。その彼らの貴族としての問題が、作者によって生と死が紙一重でせめぎあう祖国防衛戦争の現場、セヴァストーポリで追求されていることに意味がある。当時の貴族社会の閉塞的危機的状況を、作者は貴族の虚栄心など（貴族を他者と区別する要素）を分析することを通じて追求する。そのための3.2における規定であり、最終パラグラフの主人公－真実である²⁴⁾。（この点がキケロ的「真実」と異なる点である。）研究者によっては『五月のセヴァストーポリ』を暴露小説と考える意見もあるが²⁵⁾、これでは表面的な理解に留まるのではないか。

2.3、3.2、3.3をまとめると次のように言える。作者は作品世界の中で自分も属するところの貴族社会内部に光を当てている。将校グループはキケロ的「真実」をもとにして描かれ、トルストイ的「真実」により分析されている。それは3.2におけるがごとく作者に複雑な人物規定を促し、ロシア社会の小さな一部である貴族内部の世界をさまざまな別系統の人物像と対置することにより、問題を提起しているのである。

4 おわりに

セヴァストーポリを舞台に、クリミア戦争を背景に19世紀半ば、1850年代の揺れ動く貴族社会内部を作者は容赦なく追求している。それは検閲官²⁶⁾を怒らせ、パナーエフ²⁷⁾に加筆を促したほど過激なものであった。『五月のセヴァストーポリ』に限らず、

²⁴⁾ トルストイ的主人公については、Бурсов Б., «Лев Толстой и русский роман», Москва, 1960.を参考にした。プーソフはここでは『五月のセヴァストーポリ』について触れていない。

²⁵⁾ Гудзий Н., «Лев Николаевич Толстой», Москва, 1956, стр 18.

²⁶⁾ 検閲する側はこの作品を、ロシア軍を揶揄するものとして、怒りを表している。検閲委員会の長、Мусин-Пушкин は、「我らの勇敢な将校たち、セヴァストーポリの守護者たちを馬鹿にしたこの論文は発禁し、編集原稿は没収せねばならない」と言っている（4,390）。

²⁷⁾ 雑誌『同時代人』の編集者。この時期トルストイと頻繁に手紙を交わしている。ここでいう加筆とは、表現の過激さをやわらげるため、パナーエフが著者の許可なしに作品末に加えたもの。パナーエフは、『五月のセヴァストーポリ』があまりにも「悲しみ、悪意で覆われていて、すべてが過激で毒があり、容赦なく、喜びがすくない」（1855年8月28日のパナーエフからトルストイへの手紙、59, 331）、と考えた。

トルストイは自分も属するところの貴族社会の問題追求には容赦がない。本論はキケロの「真実」規定にヒントを得て、最終パラグラフに表れたトルストイ的「真実」の一部に対するささやかな考察である。トルストイがキケロ的「真実」を自己の美学に取り入れたという仮説から出発し、テキストにおけるその痕跡をみてきた。またその「真実」が作品において貴族社会を分析する指標となっていることもみてきた。初期トルストイ作品群は難解なテキストが多いが『五月のセヴァストーポリ』もそのひとつである。『五月のセヴァストーポリ』は広く人口に膾炙しており、研究者も無視することのない作品である。『五月のセヴァストーポリ』は「真実」のひとつのかたちを、ひとつの美学を示していると言えよう。トルストイはセヴァストーポリ三部作の三番目を1855年末にペテルブルグで書き上げる。そこで作家を待ち受けていたのは、チェルヌイシュフスキーを筆頭とした雑誌『同時代人』内部の激しい美学論争であった。

参考文献

- Арденс Н. Н., «Творческий путь Л Н Толстого», Москва, 1962.
- Бахтин М. М., «Проблемы творчества Достоевского, 1929». в Собр. соч. т. 2, Москва, 2000.
- Виноградов В. В., «О языке художественной прозы», Москва, 1980.
- Виноградов В. В., «О языке Толстого, 50-60е годы», в «ЛИТЕРАТУРНОЕ НАСЛЕДСТВО», т.35 – 36, 1939.
- Выгон М. И., «Крымские страницы жизни и творчества Л Н Толстого», Симферополь, 1978.
- Георгиев В. А., Кипятин Н. С., Панченкова М. Т., Шеремет В. И., «Восточный вопрос во внешней политике России, конец 18-начало 20в», Москва, 1978.
- Дорошенко С., «Лев Толстой воин и патриот», Москва, 1966.
- Кропоткин П. А., «Записки революционера», Москва, 1990.
- Лесскис Г., «Лев Толстой 1852—1869», Москва, 2001.
- Ломунов К., «Эстетика Льва Толстого», Москва, 1972.
- Лотман З. М., «Беседы о русской литературе», Санкт-Петербург, 1994.
- Чубаков С. Н., «Лев Толстой о войне и милитаризме», Москва, 1973.
- Тарле Е. В., Сочинения 9, Крымская война II, Москва, 1959.
- Эйхенбаум Б., «Толстой-студент 1844-1847», «Толстой на Кавказе 1851-1854», в «Лев Толстой, семидесятые годы», Ленинград, 1974.
- ザカリイ・コープ著、小池朋子、田村真訳、『ナイティンゲールと医師たち』日本看護

協会出版会、1979。

ナイチンゲール(述)；モニカ・ベイリー編集、助川尚子訳、『ナイチンゲールのことば その光と影』医学書院、1994。

ヒュース・モール著、田中京子訳、『ナイチンゲール、その神話と真実』みすず書房、2003。

藤沼貴、「セバストーポリのトルストイ」、『ロシヤ語ロシヤ文学研究』第1号、1969。

マルクス・エンゲルス著、大内兵衛・細川嘉六監訳、『マルクス・エンゲルス全集』第十一巻、大月書店、1963。